

# 日立市域における生活空間の構造(1)

—里川流域山間部の事例—\*

鈴木厚志\*\*・清水博之\*\*\*・松村公明\*\*\*\*

本稿は、里川流域山間部に位置する日立市下深萩地区の生活空間の構造を考察したものである。現地調査に基づく内容を主たる資料とし、本稿では住民特性・生活組織・生活行動・土地利用状況をおもな観点として検討を進めた。研究対象地域内の集落では、1960年代後半から農業の兼業化が進んだ。これにより、主力作物であったタバコ栽培の衰退がみられたが、一部の集落ではブドウやリンゴなどの果樹を導入してこれに対応している。高齢化の進む現在の集落内の生活組織は、血縁・地縁的な結びつきが基盤となって全体が構成されている。最近では、果樹栽培とその販売に対応する生産組織も構成された。住民の生活行動は、常陸太田市をはじめとする里川流域の中心地との結びつきが伝統的に強い。しかし、労働行動が日立市や水戸市などの都市部へ及ぶことにより、狭い地域に限定されていた生活行動は空間的拡大とその多様化が進展している。

〔キーワード〕 1 生活空間 2 生活行動 3 生活組織 4 地縁 5 血縁

〔keywords〕 1 living space 2 daily life behavior 3 daily life organization 4 regional relationship  
5 blood relationship

## I はじめに

本稿は日立市域における生活空間の構造を、山間部に位置する下深萩地区を研究対象地域として考察したものである。阿武隈高地南部にあたる同地区は、「都市周辺農村空間」として区分され<sup>1)</sup>、農村での余剰労働力が製造業を中心とする第2次産業へ吸収される地域として位置付けられている。具体的に、この地域には日立鉱山・日立製作所等に基軸とする急速な産業発展により、鉱工業地域社会が形成されていった<sup>2)</sup>。このような新しい地域社会を対応するため、周辺の農村は労働力の提供を中心として、その社会構造を大きく変貌させてきた。本稿では、地域社会を形成する主体者である住民からの視点、とりわけ農業を生業としてきた地域を対象とし、そこで生活する住民と土地、そして企業とのかかわりを都

市化の進展のなかで検討していきたい。

日立市下深萩地区は、久慈川支流の里川流域に位置している。里川は里美村北部から南方に流れ、常陸太田市南東部において久慈川と合流する。谷合いの地域に形成された下深萩地区の各集落は、里川の河岸段丘面上に立地し、住民の生活は南北に細長い里川流域において展開してきた。このような地域において、人間が空間と深くかかわることで体験している生活そのものを記載・分析することは、前述した視点を具体化する一つの手掛りとなるであろう。以上のような、住民の生活に関するあらゆる組織の空間単位とその階層性に着目した高橋<sup>3)</sup>は、茨城県南部地域一帯をフィールドとして研究を蓄積している。このなかで、高橋は生活組織の重層関係を考察するのにとどまらず、それらを織り成す住民の生活行動を、日・月・年などの各種時間スケールから要約した。そして、時間地理学の手法を援用すること

\* 本稿は1989年度立正地理学会研究発表大会において発表した内容を修正・加筆したものである。

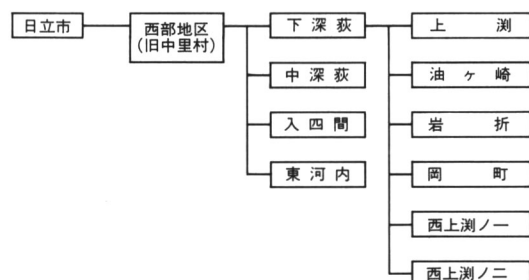
\*\* 立正大学 \*\*\* 日立市郷土博物館 \*\*\*\* 筑波大学大学院

により、人間の日常生活を空間におけるトータルな実在として検討を重ねてきた。本稿において、筆者らは高橋<sup>4)</sup>の観点を踏襲しつつ、人間が生活する場としての地域を住民特性・生活組織・生活行動・土地利用状況から考察を行う。

調査にあたっては、下深荻地区各集落の自治会長に対して聞き取りを行い、これを主たる資料とした。さらに、このような内容を強化するために、地元の有識者や篤農家に対しても同様の方法で調査を実施した。調査期間は1987年8月から1989年1月にかけて断続的に行った。内容は、農業経営・生活組織・生活行動に関するものである。このうち、農業経営と生活行動に関しては、同地区の過去的生活体系を把握するために、住民の記憶も比較的鮮明であると判断される、日立市への編入当時(1955年)頃の内容についても聞き取りをした。現地での調査に並行して、日立市役所や日立市農業協同組合においても統計資料等の収集に付随し、聞き取りを行った。以上のような、住民の生活空間把握のための調査に加えて、筆者らは1987年10月に同地区岩折・岡町集落において土地利用調査を実施し、住民が生活する場の景観把握にも努めた。

## II 下深荻地区の概観

日立市下深荻地区は、同市西部地区(旧久慈郡中里村)の一つである(第1図)。旧中里村は、同村入四間地区に日立鉱山の社宅群が立地していたことが大き

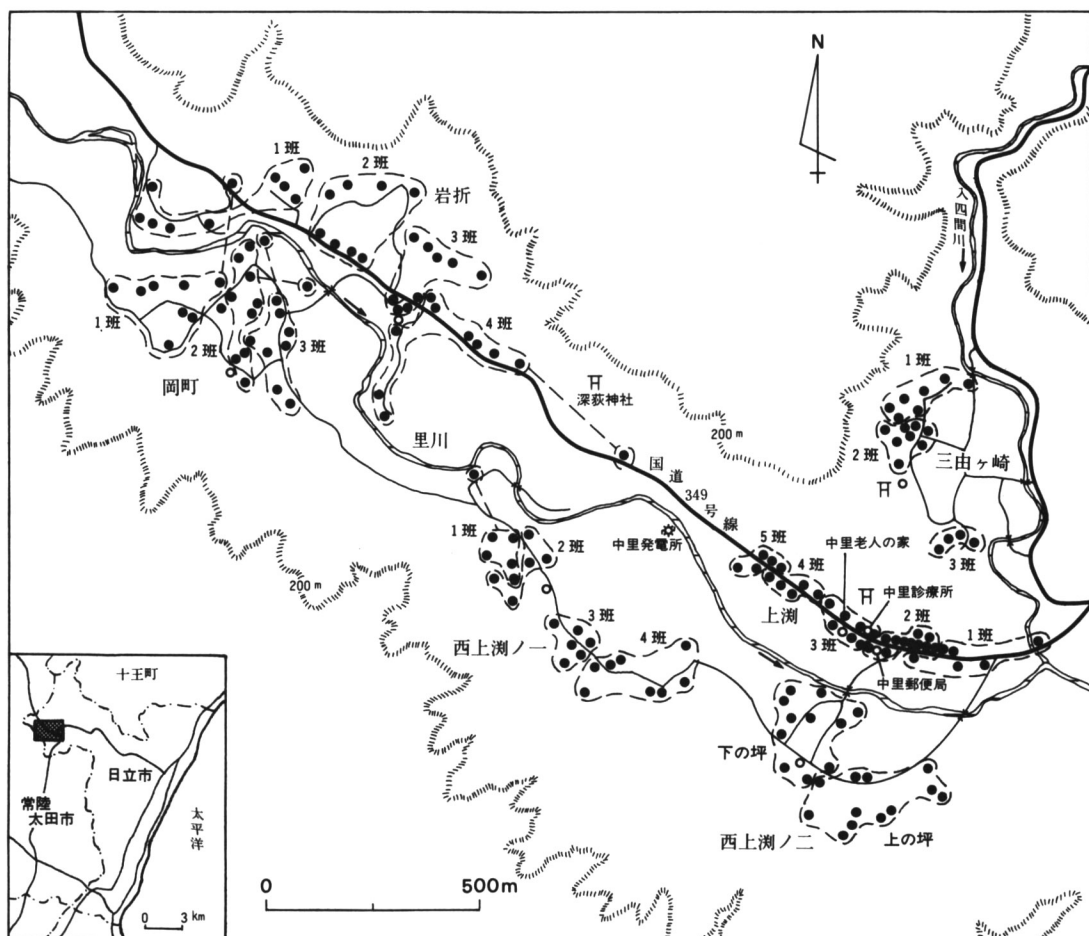


第1図 日立市西部地区の自治組織

く影響し<sup>5)</sup>、町村合併促進法のもとで1955年に日立市の行政域に編入された。下深荻地区は同市のなかで最も西側に位置し、西に水府村、南に常陸太田市、北に里美村と接する。同地区には、多賀山地と久慈山地の間を里川が南東方向に貫流する。山合いの地域のため、産業としては畑作と工芸作物を主とする農業と薪炭生産が中心であった。1960年代までの農業の中心は葉タバコの生産<sup>6)</sup>であったが、兼業化の進展とともに衰退し、現在では里川右岸の果樹栽培がこの地区の農業を特色づけている。下深荻地区の交通路としては、国道349号線(旧棚倉街道)が福島県棚倉町方面と茨城県水戸市を結んでいる。これにより、同地区は長く里川流域を主たる生活圏としてきた。

1989年の下深荻地区は、第1図に示したように六つの集落から構成されている。各集落は二つから五つの班より組織され(第2図)、班長および自治会長のもとに運営されている。各集落では、このような組織を機能させる場として公民館を有する。なお、上測集落には、西部地区全体の施設として、老人の家・診療所・郵便局が立地している。岩折集落と上測集落の間にある深荻神社は、下深荻地区の旧村社として現在も住民の信仰を集めている。

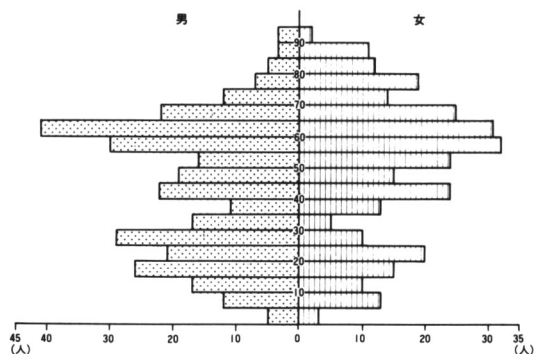
同地区の人口は、1988年現在で614人であるが、1965年の人口924人に比較すると、両年次間に33.5%の減少となっている。第3図は1988年の人口ピラミッドである。その形状を概観すれば、農村部に多くみられる「つば型」といえる。しかし、4歳以下の子供の人口が少ないこと<sup>7)</sup>、30歳代のとくに女性人口が少ないことが「つば型」の形状を歪めている。後者の年齢層は就職や結婚によって地区外へ流出したと思われる。これらとは対照的に、15~24歳と40~44歳にピークがみられる。これらは、第2次世界大戦後のベビーブーム、さらに彼らの子供たちの年齢層に相当する。また、65歳以上の老年人口率は20.26%に達しており、日立市全体の10.32%を大



第2図 日上市下深萩地区概観図(1988年)  
現地調査により作成

きく上回る。とくに70歳以上女性人口の比重が高い。

次に、同地区世帯の世代別特性についてみよう。  
第1表より、地区全体の181世帯のうち二世帯世帯が最も多く、次いで一世代、四世代世帯の順となる。ここでの一世代世帯は、核家族を意味するのではなく、子供が独立・別居した高齢者世帯のことである。直系家族が多い割に一世帯当りの人員がそれほど多くないのはこのためである。二世帯以上の世帯が多い上濁・岩折・西上濁ノ二集落においては、一世帯あたりの人員も多く、上濁集落のそれは4.9人に達する。



第3図 日上市下深萩地区の人口ピラミッド(1988年)  
日上市役所資料により作成

第1表 日立市下深萩地区における世代別世帯数(1988年)

| 世 代       | 上 刈 油ヶ崎 岩 折 岡 町 |     |     |     | 西上刈<br>ノ一 | 西上刈<br>ノ二 | 地 区<br>全 体 | 構成比    |
|-----------|-----------------|-----|-----|-----|-----------|-----------|------------|--------|
| 一世代地帯     | 10              | 8   | 13  | 13  | 7         | 7         | 58         | 32.0%  |
| 二世地帯      | 17              | 7   | 15  | 15  | 15        | 11        | 80         | 44.2%  |
| 三世地帯      | 10              | 7   | 12  | 3   | 4         | 6         | 42         | 23.2%  |
| 四世地帯      | 1               | 0   | 0   | 0   | 0         | 0         | 1          | 0.6%   |
| 合 計       | 38              | 22  | 40  | 31  | 26        | 24        | 181        | 100.0% |
| 一世帯あたりの人員 | 4.9             | 3.3 | 3.7 | 2.8 | 3.3       | 3.6       | 3.6        | —      |

日立市役所資料により作成。

下深萩地区の約7割の世帯は農家であり、兼業化が進展しつつも長く同地区は農業に生活を託してきた。第2表により、同地区の農業を概観してみよう。1985年の農家数は122戸で、そのうち専業農家が16.4%(20戸)、第1種兼業農家が6.6%(8戸)、第2種兼業農家が77.0%(94戸)の割合である。兼業化は、とくに1960年から1970年にかけて速やかに進展した。これに伴い、経営耕地の内容も変化する。1960年の経営耕地面積の合計は93.5haであったが、1985年のそれは55.8haへと減少し、一戸あたりの平均経営耕地面積は0.46haにすぎない。経営耕地の内容をみると、1960年の水田は39.9%(37.3

ha)、畑地は60.1%(56.2ha)であった。1985年になると、水田は49.1%(27.4ha)、畑地は36.9%(20.6ha)、樹園地は14.0%(7.8ha)へと変化した。タバコ栽培の衰退に伴い、畑地の面積は減少したが、その一部は1970年以降ブドウ・リンゴなどの果樹を中心とする樹園地へ転用された。畑作を中心に展開してきた下深萩地区の農業は、都市部に立地する製造業やサービス業へ農業労働力を析出することで、労働力の面から支えきれなくなっている。岡町集落を中心に行われている果樹栽培を除くと、同地区の農業は水稻や麦や自家消費のための野菜など、兼業による耕作が可能な作物生産へと変化してきている。

第2表 日立市下深萩地区における農家と経営耕地の推移

| 年次   | 農家数 農家率 農 家 人 口<br>(戸) (%) (人) |      |     | 専業別農家数            |                   |                   | 経営耕地面積      |             |             |             |
|------|--------------------------------|------|-----|-------------------|-------------------|-------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
|      |                                |      |     | 専 業<br>農 家<br>(戸) | 第1種<br>兼 業<br>(戸) | 第2種<br>兼 業<br>(戸) | 水 田<br>(ha) | 畑 地<br>(ha) | 樹園地<br>(ha) | 合 計<br>(ha) |
| 1960 | 147                            | 77.0 | 841 | 48                | 60                | 39                | 37.3        | 56.2        | —           | 93.5        |
| 1970 | 131                            | 71.2 | 691 | 15                | 42                | 74                | 34.2        | 43.4        | 1.5         | 79.1        |
| 1975 | 120                            | 69.4 | 593 | 5                 | 13                | 102               | 30.5        | 31.5        | 4.6         | 66.6        |
| 1980 | 123                            | 71.1 | 519 | 11                | 14                | 98                | 30.3        | 23.8        | 6.6         | 60.7        |
| 1985 | 122                            | 67.0 | 482 | 20                | 8                 | 94                | 27.4        | 20.6        | 7.8         | 55.8        |

世界農林業センサスにより作成。



### III 岩折・岡町集落の 農業経営と生活組織

本章では下深萩地区の六つの集落のうち、岩折・岡町集落の分析をとおして考察を進める。まず、両集落における農業経営の現状を把握し、それらを土地利用図を用いて地域に投影することにより検討する。両集落の生活組織については、各世帯を単位とする、空間的なまとまりに着目しながら分析・比較を行う。

#### 1. 農業経営の展開

##### 1) 集落の概況

岩折集落と岡町集落は、下深萩地区の六つの集落のなかで最も北側にあり、里川を挟んで左岸と右岸に位置する。岩折集落には里川左岸の段丘上に40世帯が居住し、そのうち農家は23戸である。右岸の岡町集落は1988年現在31世帯で、農家は24戸である。農家率は岡町集落が高くなっている。かつて、両集落の農業は、1960年代まで葉タバコ栽培を盛んに行った。なかでも、岡町集落は同地区六つの集落のうち、葉タバコを最も精力的に生産したとされる。本来、専業農家の栽培作物に適する葉タバコの生産は、兼業化の進展により、1970年代に入り著しく衰退した。これに対応するため、岡町集落ではブドウ・リンゴを中心とする果樹栽培を導入したが、地区全体としては兼業化がかなり進んでいる。

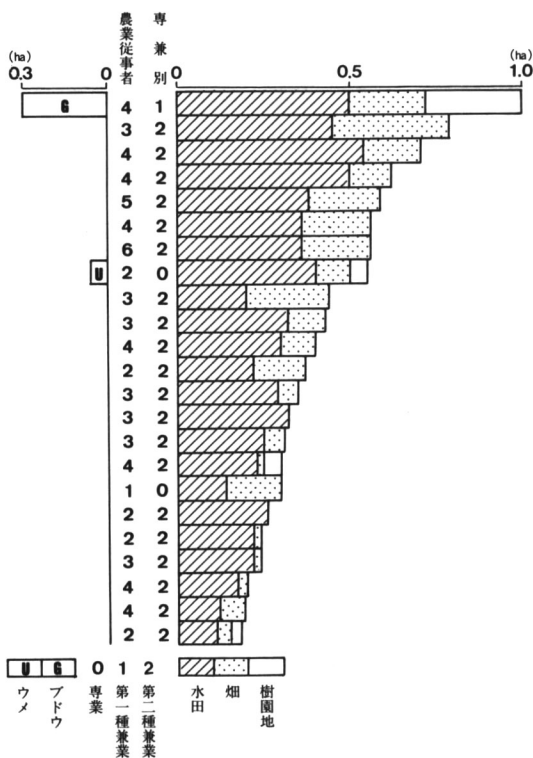
集落の形態をみよう。岩折集落には国道349号線が里川の河岸段丘を南東方向へ走り、集落内にはバス停留所がある。バスは1時間に1本程度の間隔で、福島県矢祭町と常陸太田市を結ぶ。集落内の家々は、国道から東の山側へ上る数本の道と里川へ下る道によって結ばれている。集落内には民家のほか、食料・日用品を扱う店舗が1軒、小規模な製麺工場が1軒、そして公民館が集落のほぼ中央にある。国道が集落

内を通ることにより、同地区の自動車交通量はかなり多い。集落全体の形態としては列村状といえよう。これに対し、岡町集落は疎塊村状の形態を示す。集落には環状の道があり、この道を囲むように民家が建てられている。岡町集落には、岩折集落から入る道と里川右岸の集落を結ぶ生活道路があるのみで、自動車の往来は少ない。集落内は民家のみであるが、集落の山側に阿弥陀堂を兼ねた公民館がある。

##### 2) 農業経営

岩折集落には1985年現在で23農家が存在し、全体で9.9haの耕地を有する。日上市役所資料によると、一戸あたりの平均耕地面積は0.43haで、下深萩地区平均の0.46haよりもわずかに小さい。経営耕地のうち、水田は68.8%(6.8ha)、畑地は26.8%(2.7ha)、樹園地は4.4%(0.4ha)となっている。水田の割合は同地区全体の平均よりも約20%高い。これに対し、岡町集落の農家は26戸で、14.7haの耕地を所有する。一戸あたりの平均経営耕地面積は0.61haとなり、同地区のなかでも規模が大きい。そのうち、水田は30.7%(4.5ha)、畑地は39.4%(5.8ha)、樹園地は29.9%(4.4ha)の構成比率となる。岡町集落は平坦地が少ないために水田の割合が小さいが、これに対して畑地・樹園地の割合が大きくなっている。両集落の経営耕地の特徴を反映して、岩折集落は岡町集落に畑地を、岡町集落は岩折集落に水田をそれぞれ借地耕地として耕作する例もみられる。

岩折集落の23農家を経営耕地面積順に並べると第4図のようになる。この図より、2戸の専業農家がみられるが、これらは他に職業を持たない高齢者による経営である。第1種兼業農家は1戸、他はすべて第2種兼業農家である。前述したように、各戸とも水田の割合が高く、とくに規模が小さい農家にその傾向は顕著である。各農家の畑地では、せいぜい自家用の野菜を生産するのにとどまる。果樹栽培を行うのは2戸の農家にすぎず、最大の面積を有する



第4図 日立市下深萩地区岩折集落における農家の経営耕地(1988年)

日立市役所資料・現地調査により作成

農家は、岡町集落の自治組織に加入している。

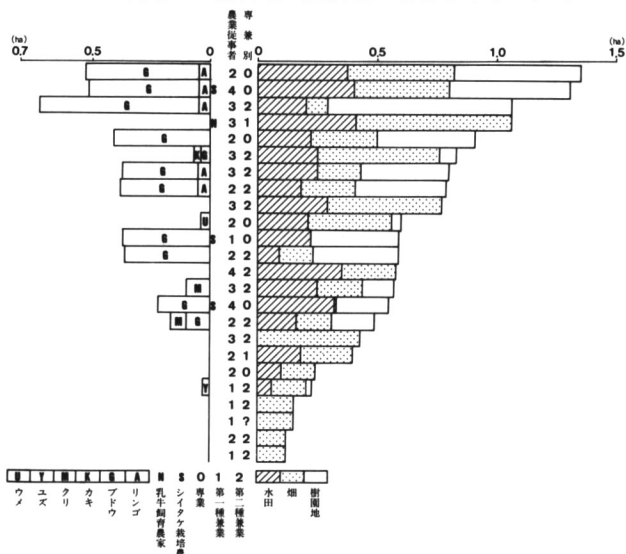
岡町集落では、農家の54%にあたる14戸が果樹栽培を行っている。それらは経営耕地面積の大きい農家に多く、専業による経営もいくつかみられる。果樹栽培を行う農家の多くは、同時に観光農園を経営している。第5図より、栽培果樹は6種類にのぼり、導入年次の早いブドウは10戸、リンゴは5戸の農家で栽培されている。ブドウの品種は「巨峰」が中心で、大半は露地栽培である。リンゴの品種は「ふじ」「北斗」「陽光」などが導入されたが、「ふじ」がその中心になりつつある。なお、栽培されたブドウやリン

ゴは市場へ出荷するには至らず、すべて観光農園や路上で販売されている。畑地においては夏季にキュウリ・大豆・ソバが、冬季に麦類が栽培され、これらは農協を通じて出荷している。さらに、シイタケ栽培を行う3戸の専業農家もみられる。現在の多様で積極的な岡町集落の農業経営は、かつて葉タバコ栽培を精力的に行った営農姿勢を受け継いでいるといえよう。しかし、現在の農業従事者はすでに60歳以上が中心であり、後継者もなく、基幹労働力の高齢化が進展している。

### 3) 土地利用

前項でみた岩折・岡町集落の農業経営の特徴を、第6図の土地利用図を開くことにより確認してみよう。両集落は里川の河岸段丘面上に展開する。岩折集落は左岸の多賀山地側、岡町集落は右岸の久慈山地側に位置し、やや多賀山地の傾斜が大きくなっている。

現在の土地利用は、里川から両集落の山地方向にかけて、基本的に水田・畑地・山林へと変化し、耕地の大半は傾斜地を利用している。水田は沢の水を利用して傾斜地に階段状に耕作するもの、そして里



第5図 日立市下深萩地区岡町集落における農家の経営耕地(1988年)

日立市役所資料・現地調査により作成

川沿いに圃場整備されたものとに分類できる。畑地には自家消費する野菜のほかはソバが多く、その後作として大麦が春にかけて栽培される<sup>8)</sup>。果樹栽培農家が多くみられる岡町集落では、山腹の傾斜地にブドウ園とリンゴ園が展開している。果樹園と果樹園の間には、観光農園への来客のために駐車場が数か所用意されている。最近の岡町集落では、リンゴ園の拡大が著しい。それには、ソバの後作となる麦畑が用いられ、リンゴが収穫できるようになる3・4年位を目安に土地利用の転換が図られる。なお、両集落の農家の敷地内には、葉タバコの乾燥小屋が残存している。それらは専ら作業場や物置として利用されているが、かつての葉タバコ産地としての残象を呈している。

以上のように、岩折・岡町集落では農業的土地利用が大半を占め、景観的にも山合いの純農村の色彩が強い。しかし、岩折集落では国道349号線の拡幅工事、岡町集落では農免道路の整備が進行している。このような生活基盤の整備は、都市的施設を増加させ、土地利用を一層都市的なものへと変化させることが予想される。農村景観の変化とともに、住民の生活空間は交通路の整備に伴い、今後大きく変容する時代を迎えるであろう。

## 2. 生活組織の諸相

人間の動的集合体とみなされる住民の生活組織は、地域組織と目的組織の二つに分類可能である<sup>9)</sup>。本節では、これらのうち機能的な生活組織の一つである自治組織、地縁的な組織とされる葬祭組織と信仰組織、さらに農業に関する生産組織について具体的に述べる。

### 1) 自治組織

自治組織は、住民により運営される最も基礎的な地域組織である。両集落の自治組織には自治会長と班長が置かれ、各役員の任期は1年である。自治組織の機能は、各世帯への連絡事項を伝達するにとど

まらず、盆踊り・花見・河原の掃除・集落で保有する祠(ほくら)の管理など、各種行事の企画・運営が集落内の公民館を拠点として行われる。

第7図は集落内の班構成の範囲を示したものである。一つの班は10戸程度で構成されている。岩折集落は4班、岡町集落は3班から組織され、両集落とも北側に位置する班に若い番号がついている。なかには、岡町集落の自治組織に所属して岩折集落に居住する世帯や班組織の範囲をまたいで分布する世帯がみられる。これらはいずれも分家であり、本家と同じ集落、あるいは同じ班に所属している。

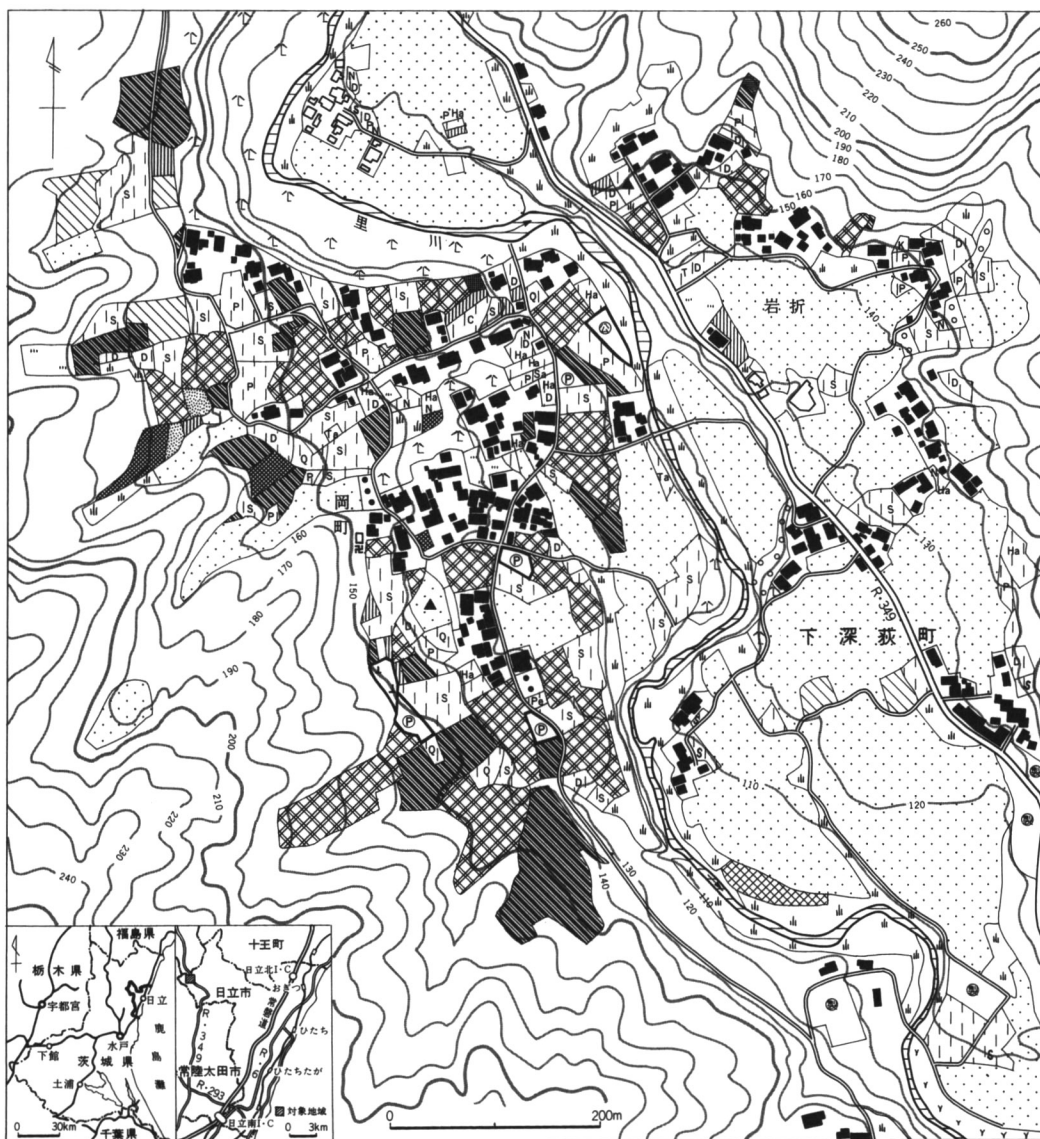
岡町集落においては、自治組織と同じ班構成に基づいて地方税徴収にかかわる納税組織<sup>10)</sup>と婦人消防団の運営が行われている。婦人消防団は、1970年代後半に日立市消防本部の指導のもとで組織され、ポンプやホースを管理する。各班から選出された2名の担当者は、これらの試運転と点検を輪番で月1回行う。この任期は1年である。

一方、岩折集落の納税組織は自治組織とは別に構成され、七つの班により運営されている(図省略)。そこには1人の組合長と各班に役員が1年任期で置かれ、地方税・国民年金等の集金を行う。また、婦人消防団の運営は納税組織を基本としている。七つの班に班長と副班長が置かれ、岡町集落と同様にポンプとホースを管理する。

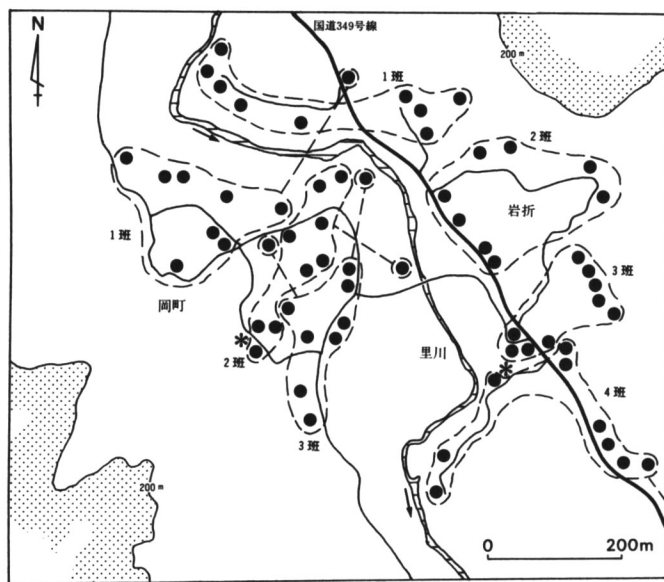
### 2) 葬祭組織

本項では葬祭組織<sup>11)</sup>を確認することにより、集落内の近隣集団の把握を試みる。岩折集落の住民は、東河内地区にある臨済宗玉蔵寺の壇家であり、この住職によって葬儀が行われる。一方、岡町集落の住民の多くは、常陸太田市西河内地区にある真言宗智教院の壇家となっている。最近、岡町集落における一部の住民は、経済的に執り行える神式の葬儀を取り入れつつある。依頼先は入四間地区の御岩神社である。

葬祭組織の単位を第8図で確認してみよう。岡町



第6図 日立市下深萩地区岩折・岡野集落の土地利用(1987年10月)  
現地調査により作成



● 民家 \* 公民館 — 班組織の範囲  
第7図 日立市下深萩地区岩折・岡町集落の自治組織(1988年)  
現地調査により作成

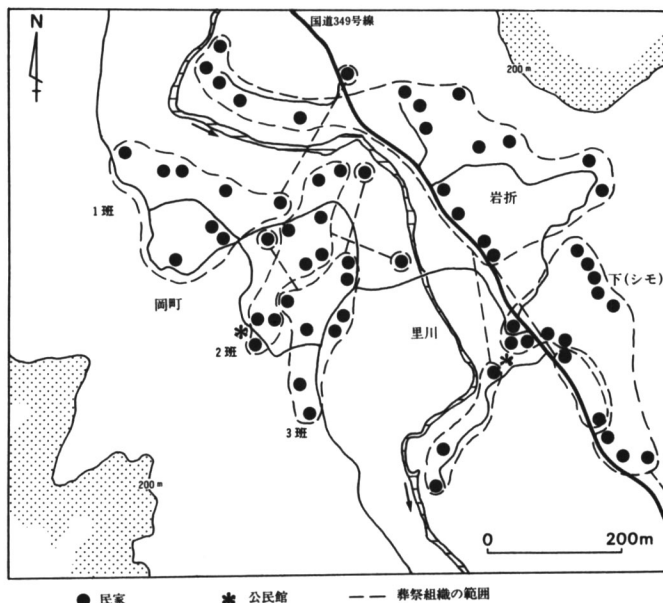
集落では、第7図でみた班組織の単位と全く同じで、地縁的な組織が現在に受け継がれていることを間接的に表現する。これに対し、岩折集落では上(カミ)・下(シモ)の二つの単位に分れている<sup>12)</sup>。両者の境界は、多賀山地側から里川に注ぐ小川である。この葬祭組織は、1890年代後半に葬儀の簡素化のために形成されたものである。それ以前は葬儀のたびに同集落の全世帯が参加していた。上(カミ)は自治組織の1・2班、下(シモ)は3・4班に概ね相当する。ただし、自治組織の4班のうちの5戸は、本家が所在する上(カミ)に含まれる。聞き取りによると、岩折集落の自治会長を決定するにあたっては、上(カミ)と下(シモ)から交互に選出されるように住民は配慮している。農村の自治組織は、本来地縁的な結合を基本とすることが報告されているが<sup>13)</sup>、両集落の班構成や葬祭組織にお

いては血縁的な要素が一層強くなっている。

### 3) 信仰組織

本項で取り上げる信仰組織は、氏子組織と民間信仰組織についてである。下深萩地区全体の祭礼は3月15日と10月20日の年2回深萩神社で行われ、岩折・岡町集落の住民もこれに参加する。深萩神社は旧村社であり、現在でも下深萩地区の各世帯は概ね氏子である。岩折集落では、氏子総代を前述した葬祭組織の上(カミ)・下(シモ)で交代するよう配慮しながら3年任期で選ぶ。そして、氏子総代を補佐する自治員も同時に選出する。一方、岡町集落の氏子総代の任期は1年であり、世話人として自治組織の班長がこれを務める。

次に、講中組織についてみていく。岩折集落には、秋葉講・おわだけ様・石尊講・数珠くり・女講・三



● 民家 \* 公民館 — 葬祭組織の範囲  
第8図 日立市下深萩地区岩折・岡町集落の葬祭組織(1988年)  
現地調査により作成

峰講・庚申講・山講の八つの講中が残存している<sup>14)</sup>。このうち、おわだけ様は上瀬集落と油ヶ崎集落にも講員が分布し、三峰講も岡町集落にまたがって行われている。一方、庚申講は前述した上(カミ)が7戸、下(シモ)が3戸の家で別個に開かれている。このほかの講中は集落として一つにまとまり、地縁的に完結している。それらの開催場所は主に岩折公民館である。

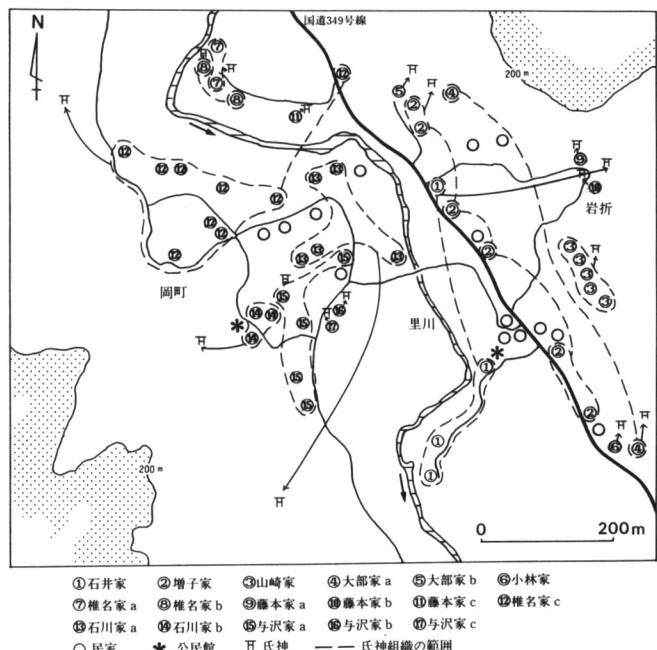
岡町集落の講中は、阿弥陀様・天祭り<sup>15)</sup>・三峰講・地藏講・庚申講・二十三夜講・山講・秋葉講などの存在が確認できた。これらの講員は、三峰講以外、すべて岡町集落の住民である。このうち、阿弥陀様は岡町公民館に阿弥陀像が置かれ、長く住民の信仰を集めてきた。祭礼は7月14日と8月14日であったが、現在は8月14日に全戸が参加して阿弥陀堂(公民館)を掃除し、夜待ちや盆踊りを行う。これらの講中は講員の家を回り宿で、あるいは公民館を会場として行われている。全戸が参加する山講と秋葉講については自治会長がこれを取りまとめ、班長が世話人として事務を補佐する。自治組織の役員は、地縁的な講中組織に対して能動的な立場が存在している。換言すると、両者は未分化であるとも評価できる。

次に、住民の血縁的なまとまりを示す氏神組織についてみよう。第9図より、岩折集落の氏神は主に民家の北東側、あるいは集落の北東側山腹に祀られている。山崎家などのように一族が近隣同志で住み、一つの氏神を祀る例もみられるが、集落全体としては組織の分化がかなり進んでいる。これらは、分家が本家とは別に氏神を祀る分家祭祠と判断できる。このような背景には、農家の兼業化に伴う分家の経済力向上などが影響していると考えられる。

岡町集落の氏神組織は、岩折集落に比較すると分化していない。氏神は集落の南西側山腹と集落内の民家の敷地内に祀られている。椎名家の氏神組織は9戸で構成され、自治組織でみた1班と一致する。石川家は二つに分れて、それぞれに氏神を祀る。与沢家は三つに分れているが、そのうち二戸の世帯は分家祭祠である。分化している石川家と、与沢家を統合すると、前者は自治組織でみた2班、後者は3班にはほぼ一致する。すなわち、岡町集落の氏神組織にみられる血縁関係は、自治組織や葬祭組織の基礎となり、住民の生活組織を強く規定している。

#### 4) 生産組織

約7割の世帯が農業を営む下深荻地区は、大半が農協の組合員であると同時に、生産組織はいずれも農業に関するものである。かつて葉タバコ栽培が盛んに行われたこの地区には、「下深荻地区たばこ耕作組合」が組織されていた。これは日本専売公社の太田たばこ耕作組合<sup>16)</sup>の下部組織であり、下深荻地区



第9図 日立市下深荻地区岩折・岡町集落における氏神組織(1988年)  
現地調査により作成

6 集落に各実行団を有していた。このうち、最も活発な活動を行った岡町集落の例について述べよう。岡町実行団は、まとめ役の団長と連絡役の総代が各 1 名、それらの下に班長、そして組合員により構成されていた。活動内容としては、指導員による年 4 回程度の講習会、飲食を兼ねた年 3~4 回の反省会、そして一泊旅行を年に 1 度行った。各集落にあった実行団は葉タバコの減産とともに縮小し、1975 年以降は西部地区全体で一つの実行団へと統合された。

兼業化の進展により、組織的な葉タバコ栽培から撤退を余儀なくされた農家に対して、農協はブドウを中心とする果樹栽培を奨励した。これを積極的に導入したのは岡町集落の農民であった<sup>17)</sup>。1972 年には 6 戸の農家によって、「中里ブドウ組合」が発足した。そして、1976 年に現在の「中里レジャー農園推進協議会(通称：ブドウの会)」に引き継がれている。この組織は農協の指導のもとで運営され、栽培講習会、先進栽培地の視察、共同販売を主な活動内容としている。役員は会長と副会長が 1 名ずつ、さらに

会計と幹事がこれを補佐する。会員数は現在 16 名で、そのうち岡町集落が 11 名、西上瀬ノ一集落が 4 名、岩折集落が 1 名となっている(第 10 図)。

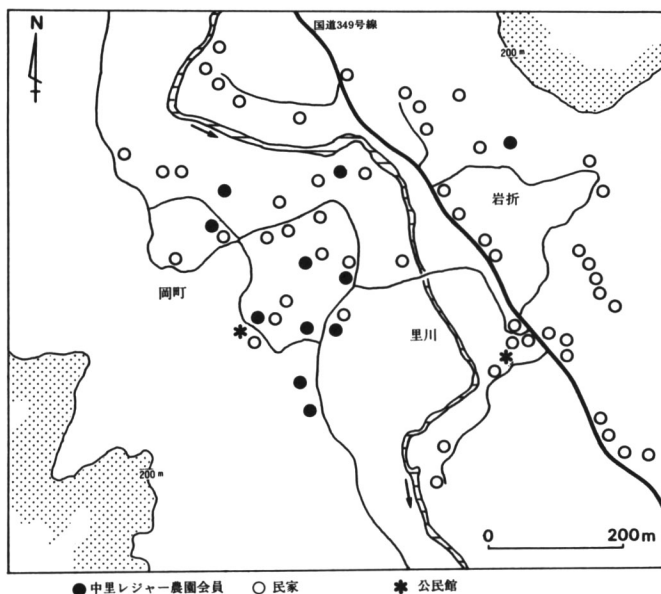
岡町集落のブドウ栽培が順調に推移すると、果樹を手がける農家はしだいに増加した。作物もブドウのみにとどまらず、1983 年からはリンゴを中心にカキ・ユズ・ネクタリンなどが導入され始めた。このような背景には、他の果樹を導入することで観光農園開設期間の延長を図り、なおかつ里川の右岸を「果樹の里」にしようとする農協の意向があった。これにより、1986 年に「農協里川西特産果樹生産部会」が 12 名の農民で発足し、現在 46 名の会員により組織されている<sup>18)</sup>。おもな活動としては、栽培講習会、剪定講習会、苗木注文の取りまとめ、先進栽培地の視察などを行っている。この組織はリンゴ・ユズ・カキ・ネクタリン・リンゴ団地の各生産班から構成され、それぞれに班長と副班長がいる。彼らが 3 年任期で役員<sup>19)</sup>を務めることにより、この生産部会は運営される。46 名の会員には、里川右岸の農家が多

数加わる。なかでも、西上瀬ノ一集落では 69%、岡町集落では 52% の世帯が会員となっている。岡町集落では、前述した「中里レジャー農園推進協議会」と重複して加盟する農家も多い。

以上のような生産組織のほか、下深荻地区にはシイタケ栽培に関する組織<sup>20)</sup>が確認されている。しかし、岩折・岡町集落には加盟する農家が少ないことから説明は省略する。

#### IV 下深荻地区住民の生活行動

本章では、下深荻地区住民の生活行動圏を日立市への編入当時頃(1955 年)との比較において記述する。さらに、現在の住民の日常的な生活行動の事例を、職



第 10 図 日立市下深荻地区岩折・岡町集落における中里レジャー農園分布(1988 年)  
中里レジャー農園推進協議会名簿・現地調査により作成



業ごとに分析してみた。

## 1. 住民の生活行動圏

### 1) 労働行動

下深萩地区の農民の労働行動は、葉タバコの栽培の衰退以前と以後では大きく異なる。葉タバコ栽培が盛んに行われていた1950年代の行動圏は、大半が自宅から所有する耕地までの範囲にとどまっていた。借地耕地での労働を考慮しても、せいぜい隣接する集落内の耕地を徒歩で移動したのにとどまる。葉タバコの出荷時には、同地区の南方約4kmの常陸太田市町屋地区へ運搬し、肥料やタネ類を購入して帰宅した。

1960年代後半に入ると、世帯主の多くは現金収入を求めて兼業経営への転換を図るようになる。しかし、就業希望者の大半は40歳代後半にさしかかっており、日立鉱山や日立製作所など大規模事業所への就職は困難であった。その多くはバスやバイクによる通勤が可能な、常陸太田市や里美村にある日立製作所等の下請工場などに就職した。また、下深萩地区から里美村にかけて立地する製材工場の従業員、あるいは土木作業員として地元で職を求めた農民もかなりいる。これらはいずれも肉体労働、または単純作業に基づく労働であり、現在でも継続している。

1970年代になると、彼らの子供たちは日立市・勝田市・水戸市・東海村などの大企業に就職し、自動車通勤を行うようになる。第3表からも明らかのように、平地の少ないこの地区において子供が農業を継ぐのはごく少数である。子供たちの多くは、男女を問わず就職後に同僚などと結婚し、都市部で暮すようになる。

以上のように、下深萩地区の労働行動は世代を経ることで、同地区内から日立市や水戸市をはじめとする都市部への通勤へと拡大し、やがて都市部に転出して生活を始める。すなわち、同地区の労働行動は移動手段の変化に伴い通勤範囲を拡大し、内容を

農業から第2次・第3次産業へと多様化させている。

### 2) 購買行動

住民の購売行動は、交通手段の変化による影響が大きい。1950年代の最寄り品のうち、鮮魚と日用品以外はほとんど自家生産で賄われていた。鮮魚に関しては日立市久慈浜の魚屋が自転車で行商し、住民はこれを購入した。日用品は下深萩地区に隣接する東河内地区の雑貨品店で購入している。買回り品に関して、当時の農家は現金収入が少ないこともあり、よそゆき着などを購入する頻度はかなり少ない。大半の住民は東河内地区の衣料品店で買物を済ませて

第3表 日立市下深萩地区住民の家族構成の事例(1988年)

|    |   |
|----|---|
| Y家 | 世帯主(64):日立精工(里美村)<br>妻 (61):家電組立パート(里美村)<br>長男 (38):《東京都立川市, 東京電力》<br>長女 (35):《埼玉県越谷市, 主婦》<br>次女 (33):《日立市田尻町, 主婦》<br>次男 (31):《岩手県花巻市, 国家公務員》           |
| S家 | 世帯主(63):日立製作所関連下請け工場経営<br>妻 (64):工場手伝い<br>長男 (41):《水戸市水府町, 不動産経営》<br>次男 (39):《日立市助川町, 日産観光》<br>三男 (35):《日立市田尻町, 日立製作所日立工場》<br>長女 (32):《常陸太田市金井町, 主婦》    |
| O家 | 世帯主(54):石川工業(常陸太田市)<br>妻 (52):農業<br>妻の母(86):家事<br>長男 (27):《日立市大みか町, 日立消防署》<br>次男 (24):日立電鉄(常陸太田市)   |
| S家 | 世帯主(59):中学校校長(水府村)<br>妻 (56):家事・農業<br>世帯主の父(91):農業<br>世帯主の母(90):家事<br>長女 (30):《常陸太田市, 主婦》<br>長男 (28):《日立市国分町, 日立製作所多賀工場》<br>次男 (26):《日立市桜川町, 日立製作所多賀工場》 |

注)( )内の数字は1988年現在の年齢である。

《 》内は別居している家族である。

現地調査により作成。



いるが、ごく少数の住民が常陸太田市市街地や同市町屋地区で購入した。

現在の最寄り品購入に際しては、東河内地区の商店、移動スーパー<sup>21)</sup>や生活協同組合の共同購入、そして都市部のスーパーマーケットでの購入に分類できる。高齢者による世帯は、地元の商店や集落内にくる移動スーパーに依存する。これに対し、若年層のいる世帯では、休日に自動車ですーパーマーケットへ出かけ、数日分の食料品や日用品をまとめて購入する例が多く調査された。買回り品の購入先は、常陸太田市・水戸市・日立市などに及ぶ。自動車を保有する世帯は、休日に余暇を兼ねて食料品や日用品とともに都市部の大型店などで購入する。他方、高齢者世帯の場合は都市部に居住する子供たちが帰省する際に、本人に代って購入してくる例が多く認められた。

下深萩地区の購買行動は、現金収入が増えるのに伴って活発になり、購入頻度も増加する。しかし、山間部に位置する同地区では、自動車保有の有無が購入先の選択範囲を規定しているといえよう。購入先としては伝統的に常陸太田市などに強く依存し、このことは従来からそれほど変化していない。

### 3) 受療行動

1955年当時、下深萩地区には医療機関はなく、住民の多くは南方約3kmの日立市東河内地区良子(ヤヤコ)のM医院で診療を受けた。M医師は親子2代にわたり、里川流域住民の医療に広く貢献した<sup>22)</sup>。交通手段を持たない世帯に対し、M医師は自転車で気軽に往診に応じたため、住民の信頼はかなり厚いものがあつた。これに対し、入院を要する病気の時には、常陸太田市の病院を主に利用した。

1979年にM医師が死亡したことにより、日立市西部地区一帯は無医地区となった。このため市当局は、同年に中里診療所を下深萩地区上瀬集落に設置し、施設と医療機器を無料貸与して医師を招聘した。これにより、同診療所は西部地区住民に広く利用され、

医師が常住することで安定した医療を提供している。入院に際しては、常陸太田市の病院を多く利用することに以前と変わらないが、病気に応じて日立市・水戸市・つくば市などの病院で診療を受けている<sup>23)</sup>。

下深萩地区住民の受療行動は、交通手段を持つことにより、医師への往診依頼が減少した。そして、入院の際に住民は、より高度な医療を求めて選択行動が広域化する傾向が認められる。しかしながら、基本的な住民の受療行動パターンは固定しており、近年それほど大きな変化はみられない。

### 4) 余暇行動

住民の余暇の過ごし方は、年齢や職業など個人がおかれている立場に応じてさまざまである。本項では年周期の余暇に関して、一泊、あるいは連泊旅行の例を中心に述べていく。従来の余暇行動は、講中などによる集落内での飲食や祭などが中心で、一泊以上の旅行機会は少なかった。わずかに里川上流域の温泉に近隣同志で出かけた程度にすぎない。1960年代に入り、耕運機などの農業用機械が導入されたと、購入に際しメーカーが企画した旅行に参加した例がいくつかみられた。また、この頃から生産組合<sup>24)</sup>の組合員による連泊旅行が次第に行われるようになる。現在でも生産組合を中心とする旅行は<sup>25)</sup>、先進栽培地の視察を兼ねて実施されている。

現在、西部地区には「中里地区旅行会」が中里郵便局を中心として組織されている。会員は毎月積立を行うことにより、年1回程度関東甲信越地方の観光地を1~2泊で旅行する。また、上瀬集落や西上瀬ノ二集落では婦人部が旅行会を組織し<sup>26)</sup>、月々の積立をすることで1泊旅行を実施している。自動車化が進展することで、日帰り旅行は家族が中心となるが、連泊旅行に際しては地域組織や企業が主催する団体旅行への参加が多い。行先としては北関東から南東北地方が多かったが、最近では東日本を中心に拡大し、行先も多様化している。これらのほか、下

深萩地区を離れて暮す遠方の子供を訪問する旅行も、住民の余暇行動に大きな割合を占めている。

## 2. 生活行動の事例

住民の生活行動のなかで最も基本的なものは労働であり、生活行動の差異は労働のための行動によって生じるとされている<sup>27)</sup>。本節では農業従事者のA氏、農外就業者のB氏・C氏の行動を連続する一日の時間のなかで分析してみる。

### 1) 農業従事者A氏の例

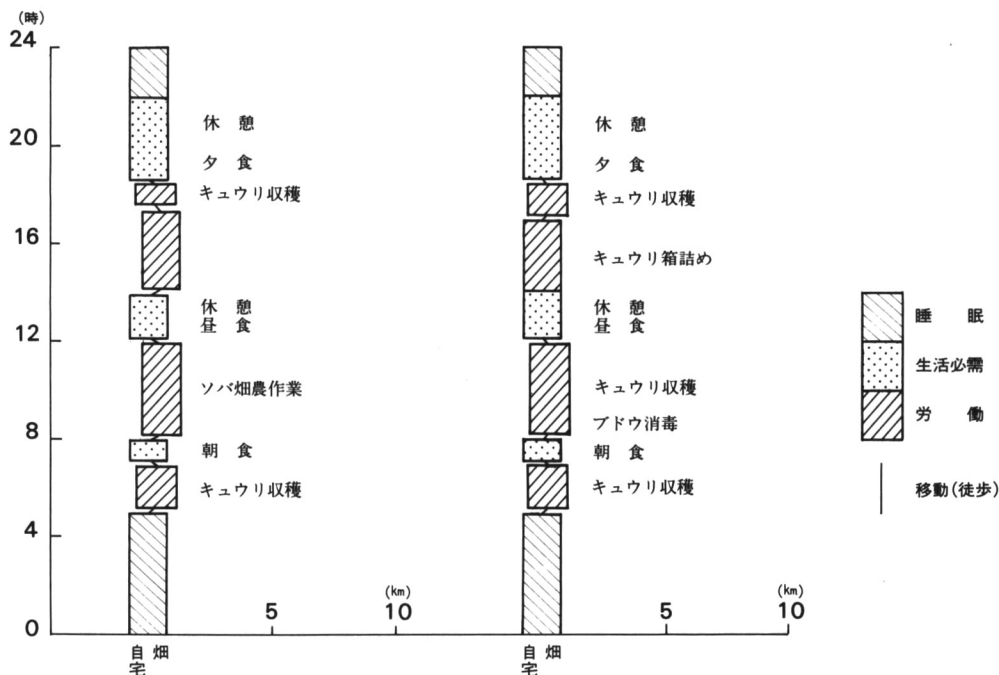
A氏の家族は、妻と子供4人の6人家族であった。しかし、現在子供たちはいずれも下深萩地区を離れて暮している。農業の担い手はA氏(1928年生)と妻(1927年生)の二人であるが、水田・畑地・樹園地など1.31haの経営耕地と約2,000本のほだ木でシイタケ栽培を行う専業農家である。第11図をもとに、1987年8月のA氏の週日と休日の行動をみよう。

8月はブドウ・リンゴなど果樹の消毒やキュウリ

の収穫、そしてソバの種まきが始まる時期である。A氏の週日は朝5時に起床し、自宅から200m離れた畑へ徒歩で移動してキュウリの収穫を行う。朝食後は300m離れた畑でソバの種をまくための中耕をし、その作業は昼食後にも繰り返している。さらに、夕食前には朝とは別の畑でキュウリを収穫し、一日の労働を終えて21時30分に就寝する。休日も週日と同様、食事の時間をはさんで断続的に農作業を行う。午前中のブドウ消毒や午後自宅でのキュウリの箱詰めなど、週日の内容とは若干の違いがあるものの、基本的な生活行動のパターンは同じである。

A氏的生活行動は、週日・休日ともほとんど違いがみられず、むしろ栽培作物や天候によって左右されるといえるだろう。行動範囲は集落内の耕地においてほぼ完結し、自宅も労働の場として機能している。これにより、労働と生活心需<sup>28)</sup>に関する生活行動はかなり接近して行われている。

### 2) 農外就業者B氏の例



第11図 農業従事者A氏の週日と休日の生活行動(1987年8月)  
現地調査により作成

B氏は1924年生れで、現在里美村の日立製作所系列工場に勤務しつつ、水田・畑地の0.37haの農地を有する第2種兼業農家の世帯主である。B氏の家族は妻(1927年生)と4人の子供たちから構成されていたが、子供たちはいずれも下深萩地区を離れ、現在は妻と二人で暮している。B氏は第2次世界大戦前に日立製作所日立工場と多賀工場に勤務した後に徴兵、終戦後から1970年までは専業で農業を営み、以後常陸太田市の茨城交通、そして1984年に現在の勤務先へ転職している。妻も里美村の家電部品工場においてパートとして働いている。1988年7月のB氏の生活行動を第12図よりみよう。

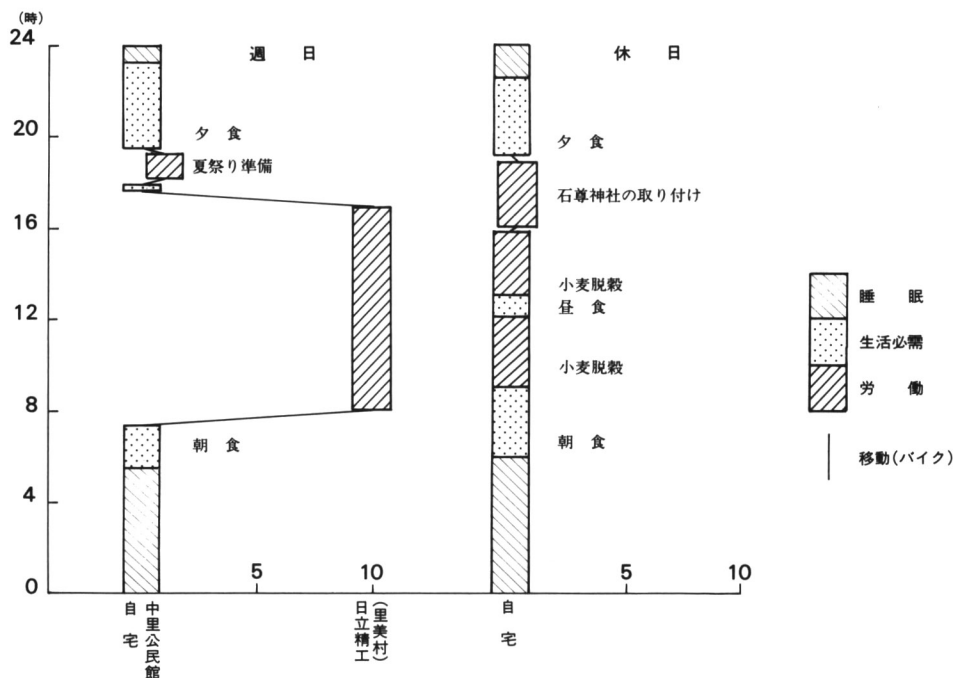
週日のB氏は、朝6時に起床して朝食をとった後に、7時30分にバイクで10km離れた里美村の工場へ出勤し、17時30分に帰宅する。その後、岩折集落の自治会長でもあるB氏は、夏祭りの役員会のため、1.5km離れた中里公民館へバイクで出かけ、約1時間の打合せの後に帰宅する。それから夕食をとり、

23時に就寝する。休日は昼食をはさんで小麦の脱穀を行い、16時から石尊神社の小祠の付け替えのため、岩折公民館へ出かけ、19時に帰宅した。帰宅後は夕食をとり、22時30分に就寝する。

兼業農家を営むB氏の生活行動は、週日と休日の差異が明瞭である。農業に関わる労働は休日に妻とともに集約して行う。行動範囲はバイクを利用することにより、里川流域を南北に移動する。また、B氏は自治会長の役にあるため、短時間ではあるが夕方を中心にして、下深萩地区内の集落施設を利用した行動が発生している。

### 3) 農外就業者C氏の例

C氏の家族は母親と妻、そして2人の子供により構成された三世代世帯である。C氏(1946年生)は地元の大学を卒業後、東京の工作機械メーカーに就職するが、後に現在勤務する日立製作所の系列会社に転職している。その際、直ちに生家に帰ってきたのではなく、日立市諏訪町にある社宅で7年間生活し



第12図 農外就業者B氏の週日と休日の生活行動(1988年7月)  
現地調査により作成

た。子供は小学生と中学生で、東河内地区の学校に通学している。妻(1948年生)は1983年から、里美村南部のガソリンスタンドにパートとして勤めている。

第13図よりC氏の生活行動をみよう。1989年1月のC氏の週日は朝6時30分に起床し、7時45分に日立市幸町にある日立製作所日立工場内の勤務先へ自動車で出勤し、20時20分まで残業して退社する。帰宅は21時15分頃で、夕食・休養をとり、23時に就寝する。休日は6時30分に起床して朝食を済ませると、会社の同僚とゴルフのため、約10km離れた水府村のゴルフ場へ自動車で出かける。15時にゴルフを終えると、日立市役所付近にある囲碁道場へ一人で向い、そこで21時まで個人の趣味を楽しむ。その後、21時30分に帰宅して夕食をとり、23時には就寝する。

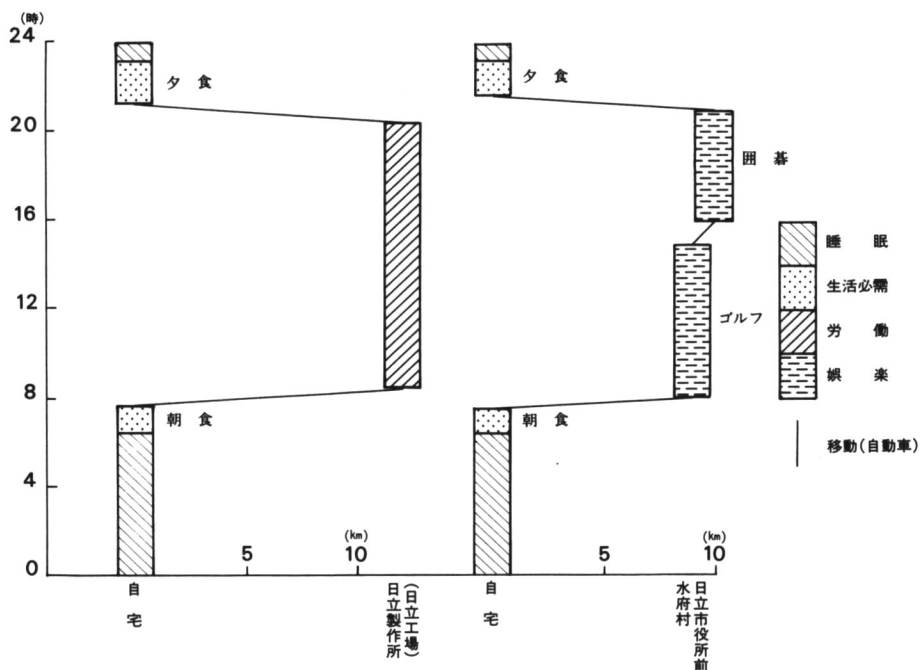
サラリーマンであるC氏の生活行動をみると、週

日の内容は規則的であり、休日との差異が明瞭である。移動手段には自動車を利用しているため、前述した二人に比較して移動距離が大きい。また、労働・余暇・休養の場所は、空間的に明瞭に区別されている。しかし、C氏の生活行動には、先に述べた2人の例でみられたような集落内にかかわる内容が存在していない。むしろ、休日のゴルフのように勤務先での人間関係を優先させる、社縁的行動の一面をみることができる。

## V おわりに

本稿は日立市下深萩地区の生活空間の構造を、住民特性・生活組織・生活行動・土地利用状況をおもな観点として考察したものである。明らかになった諸点を要約すれば、以下のようになろう。

1. 阿武隈高地南部に位置する下深萩地区は、旧久



第13図 農外就業者C氏の週日と休日の生活行動(1988年1月)  
現地調査により作成

慈郡中里村の一つであり、1955年に日立市へ編入されている。同地区内の各集落は里川の河岸段丘面上に立地し、住民はこの川の流域を生活圏としてきた。1960年代に入り、同地区では若年層を中心とする人口流出により、高齢化の進展が著しい。

2. 下深荻地区岩折・岡町集落の農業経営の内容は対照的である。同地区の葉タバコ栽培が衰退すると、岩折集落の農家の多くは兼業化を図り、農業経営は消極的な内容へと転じた。一方、岡町集落ではブドウ・リングを中心とする果樹栽培を導入した。果樹は山腹の傾斜地に栽培され、近年はリング園の拡大が進んでいる。果樹栽培農家の多くは観光農園を営営し、農協が主導して組織した生産組合に加盟している。

3. 岩折・岡町集落の生活組織は、住民の地縁・血縁的な結びつきが基盤となって形成されている。両集落では、比較的新しい組織である自治組織においても、葬祭組織や信仰組織などの伝統的な生活組織との密接な関係が確認された。このような伝統的な生活組織のほとんどは、集落内の狭い空間単位で完結している。

4. 住民の生活行動は里川流域を圏域としてきたが、兼業化の進展とともにそれらは広域化した。世代を経るにしたがい、住民の多くは地区内から都市部へと労働行動を拡大させ、非農業的生産へ従事するようになった。これにより、狭い地域で展開されてきた購買行動や余暇行動も空間的に広域化した。このような背景には、同地区が大規模な雇用力を有する就業地に近いことと通勤を可能にした自動車の普及による影響が大きい。それゆえ、自動車の有無は、住民の生活行動の内容と距離に著しい差異をも

たらしている。

5. 世帯主の一日の連続する生活行動を職業別に検討すると、それらには明瞭な違いが認められる。農業従事者の生活行動は、集落内の耕地において完結し、週日・休日の内容はそれほど違わない。これに対し、農外就業者の生活行動は、バイク・自動車を使用するため移動距離が大きい。休日には職場の人間との余暇行動も確認され、むしろ集落内に関わる行動内容は少ない。概して、労働・余暇・休養などの場は空間的に区別され、規則的な行動をとる。

6. 里川流域山間部の生活空間は、1960年代に入り大きく変化した。かつて、住民の生活組織や行動は地区内、あるいは里川流域において完結していた。しかしながら、兼業化の進展、さらには個人の価値観が多様化するに及び、住民の生活基盤は土地そのものから離れていくようになった。自動車の普及をはじめ、着実に進む山間部での近代化の進展は、生活空間を拡大・多様化させることで土地利用の変化をもたらした。住民の生活様式を次第に変容させつつある。

以上を換言するならば、筆者らは里川の河岸段丘面という自然環境を基盤とした農業を維持しながらも、鉱工業地域社会へ同化しつつある生活空間の存在をここに確認したといえよう。

本稿を作成するにあたり、立正大学の服部銈二郎教授には貴重なご助言をいただいた。現地では、下深荻地区各集落の自治会長をはじめとする住民の皆様、そして日立市役所、日立市農業協同組合の方々には聞き取り調査や資料収集に快く協力していただいた。以上、記して心から感謝申し上げます。

(1990年3月14日 受付)

(1990年4月15日 受理)

# 注および参考文献

- 1) 山本正三・北林吉弘・田林 明共編(1987)：『日本の農村空間—変貌する日本農村の地域構造—』古今書院, 423 p.
- 2) 岩間英夫(1987)：日立鉱工業地域社会の形成と再生の要因。地理学評論, 60-6, 355-378.
- 3) 高橋伸夫(1987)：日本の生活空間にみられる時空間行動に関する一考察。人文地理, 39-4, 295-318.
- 4) 前掲 3)
- 5) 鉱山の歴史を記録する市民の会編(1988)：『鉱山と市民—聞き語り日立鉱山の歴史—』日立市役所, 392-401, 769-773.
- 6) 第2次世界大戦前までの品種は水府種, 戦後は松川種を耕作した。
- 7) 岡町と西上瀬ノ一集落において, 4歳以下の子供は居住しない。
- 8) ソバは, かつて山合いの葉タバコ産地において広く栽培された。なぜならソバは栽培期間が短く済むため, 後作の麦類を植えるまでに収穫できるからである。現在, 両集落のソバの大半は, 観光農園開催時に顧客へ昼食としてサービスするために栽培されている。
- 9) 前掲 3) によると, 地域組織とは全住民の加入が期待される自治組織などが代表的なものである。目的組織とは個人の関心を充すために組織化されたもので, 生産・余暇・社会組織などの多様な組織が存在する。
- 10) その集金は班長が行っている。
- 11) 浜谷正人(1988)：『日本村落の社会地理』古今書院, 70-76. では, 互助組織と呼称している。
- 12) 前掲 11) 94-102 によると, 日本の村落においてこのような二項対立的な空間分割は, 非日常的な生活の諸部面で顕現することを指摘している。
- 13) 山本正三・伊藤貴啓・呉羽正浩・須山 聡(1988)：茨城県波崎町松下地区の土地利用と生活形態。地域調査報告, 10, 105-145. においても同様の指摘がみられる。
- 14) これらはその信仰内容により, おわだけ様は愛宕神, 数珠

- くりは念仏講, 女講は子安講のことと判断される。
- 15) 天祭りは, 「天道祭り」ともいう。
- 16) 茨城県たばこ史編さん会(1974)：『茨城県たばこ史』茨城県たばこ耕作組合連合会, 339-360.
- 17) ブドウ栽培は1975年より, 「巨峰」「スーパー」を中心に開始された。
- 18) 日立市農業協同組合(1985)：農協里川西特産果樹生産部会名簿。
- 19) 役員は, 会長1名, 副会長2名, 会計1名, 委員6名, 監事2名で構成されている。
- 20) 下深萩地区でシイタケを栽培する農家は現在8戸で, 生産組合は「日立市中里椎茸生産出荷組合」と「農協椎茸生産部会」が確認されている。
- 21) 移動スーパーによる販売があるのは, 油ヶ崎と西上瀬ノ一集落である。油ヶ崎集落では月曜日と金曜日に日立市の業者が, 西上瀬ノ一集落では水曜日と土曜日に常陸太田市の業者が販売にくる。
- 22) 塙 泉嶺編(1924)：『久慈郡郷土史』宗教新聞社, 181-191.
- 23) 病院の選択に関しては, 子供が生活している都市部の大病院, あるいは勤務する企業の付属病院が強く指向されている。
- 24) 聞き取りによると, 椎茸生産に関する組織の旅行は1960年代から行われている。
- 25) とくに, 果樹生産に関する組織において活発である。
- 26) このような旅行会は, 婦人による遊山講が変化したものと考えられる。
- 27) 前掲 3)
- 28) 生活必需行動とは, 生理的休養と精神的休養を統合した呼称である。  
NHK 放送世論調査所(1976)：『国民生活時間調査』日本放送協会, 22-23.  
高橋伸夫・田上 顯・斎藤一彰(1987)：茨城県新治村におけるコミュニケーション空間に関する地理学的研究。人文地理学研究, 11, 83-113.

## The Spatial Structure of Living Space in Hitachi City

### 1; A Case Study of the Sato River Basin

**Atsushi SUZUKI\***      **Hiroyuki SHIMIZU\*\***      **Koumei MATSUMURA\*\*\***

The present paper attempts to investigate the spatial structure of life space distribution of Shimofukaogi district in Hitachi City, which is located in the Sato river basin. A questionnaire survey was conducted to collect information. In particular, the president of the commune, some learned persons, well some outstanding farmers were selected to gather information for this study. Based on this investigation, the characteristics life-space distribution, the organization, the sphere of activities and the land use of the study area are described. Our findings are summarized as follows:

1. Villages of Shimofukaogi district are located on the river terrace of the Sato river. People in the study area have made use of the river basin of the Sato river for residential and use of the river basin of the Sato river for residential and farming purposes. There the population ratio of the aged group is steadily increasing from 1960's due to the migration of youths from this district towards neighboring cities and Kanto area.

2. Shimofukaogi district was intensively cultivated with tobacco in the beginning of the 1970's. With the decline of tobacco cultivation, many farmers of Iwaore village in the study area have turned their job from full-time farming to part-time farming, and began to do other jobs, which give a partial and stable income. Therefore, farming in Iwaore village changed to the passive one. On the other hand, farmers of Okajyo village in the same area introduced fruit cultivation that mainly includes grapes and apples.

3. The organization of each village in the Shimofukaogi district is characterized by regional and blood relationships between the dwellers.

4. The spheres of activities have widened with an increase of part-time farmers. The penetration of motorization into the study area and increased accessibility for employment opportunities in neighboring cities (for example, Hitachi City) have substantially contributed to the above mention factor.

5. Types of work activities are identified by examining the characteristics of workers, type and means of work. Activities of farmers, who move on foot, are found within a short range. Moreover there are not any differences between weekdays and Sunday in their activities. Further, non-farmer's activities, on the other hand, extend to neighboring cities beyond the basin of the Sato river. They use motorcycles and automobiles as their main means of transportation. As a result, places of daily activities (work, leisure, rest, etc.) are distinguished spatially and therefore, patterns of their activities do exhibit a regularity.

---

\* Rissho University, \*\* Hitachi-City Museum, \*\*\* Graduate Student of University of Tsukuba